特定非営利活動法人バル・ピパル奨学基金
事業報告　第 11 号（2013・2014 年度）

★　ネパール中部で発生した地震による村の被害状況

2015 年 4 月 25 日に発生した地震はネパール史上最大の国難をもたらしました。ネパール政府の報告によると、その後の余震も含めた被害は、死者約 9 千人、負傷者 2 万人以上、建物の全壊約 60 万 5 千棟、半壊約 29 万棟でした。またユニセフの発表では、倒壊した教室は約 3 万（倒壊した学校は約 8 千 3 百校）で、学ぶ場を失った生徒数は約 100 万人になります。

サッレ村があるダディン郡は震源地ゴルカ郡の東に隣接し、他の多くの村々では死傷者がでましたが、幸いにもサッレ村の住人は全員無事でした。しかし家屋は石と粘土でできているため、ほとんどが被害を受けて住めない状態となり、また納屋の倒壊により財産である家畜も数頭死にました。

村に車道が通っているため、地震発生後の比較的早い時期に、国内外のボランティア団体がビニールシートや食料などの支援物資の配布に来てくれました。車道のない村々の住人達は支援が来ないため、配布場所まで何時間も歩いたそうです。2006 年にサッレ村に車道を開通して下さった京都中ロータリーの皆様には、改めて感謝申し上げます。

リジャルは、勤務する東京都市大学から被害状況の調査のためにネパールへ派遣され、5 月 17 日～24 日にカトマンズ盆地やサッレ村を訪れました。サッレ村の全 60 世帯のうち、ほとんどの家屋は再建が必要でした。全壊・半壊の家屋のほか、外観では何も影響がないように見える家屋も屋内はヒビ割れがひどく住めない状態です。そのため、大半の村人は納屋や屋外に設置した簡易なテントに住んでいました。帰国後、東京都市大学・横浜キャンパスにて、7 月 8 日の報告会、6 月 7 日の横浜祭で地震の被害状況、住民の意識調査結果などを報告しました。

★　バル・ピパル学校の状況

学校の図書館は鉄筋コンクリート建設のため無害でしたが、それ以外の教室・教員室など全 17 室のうち 15 室は全壊や半壊がほとんどで、再建が必要な状態でした。2 室だけは補修すれば使用可能でした。この 2 室は日本の JICA の経済支援と技術指導で建設された構造のため、強度があったようです。

ほぼ全壊の家屋

ほぼ全壊の学校

半壊の学校

★　地震後の現地での支援活動

この状態では 6 月～9 月の激しい雨期を迎えることは不可能と思い、屋根に使用するトタン板を現地で購入し全 60 世帯に 8 枚ずつ配りました。同時に、リジャルの母校であるカトマンズのトリブバン大学建築学科の学生が考案した、かまぼこ形の仮設住宅を同学生達と一緒に 5 軒建てました。これは被害が大きく経済力が低い 5 世帯に提供しました。また、仮設教室用に 10m 四方の 2 枚の大判の防水 UV シートで 2 張の大型テントを校庭に設置しました。黒板も壊れたため薄いロール状の黒板シート 20m で簡易黒板を複数作りました。これらで何とか直近の雨期を乗り切ることができるようにしました。その他に、学校の各生徒にノート 12 冊と鉛筆を配りました。地震でノートが使えなくなった生徒が多かったのです。

今回のトタン板は日本の方々から村へのお見舞い金から購入させていただき、大型テントと黒板は日本でご寄与いただきました。文房具はバル・ピパル奨学基金より寄与しました。皆様のご支援でこれらの活動を行うことができました。誠にありがとうございました。

60 軒に 480 枚のトタンの配布

配布されたトタンを運ぶ

5 軒のかまぼこ形仮設住宅の建設

学校に 2 張のテント設置

簡易黒板の設置

文具品の配布

★　現状と今後の支援活動について

地震から 4 ヶ月が経ち、ほとんどの住人達はトタンやビニールシートの仮設小屋で暮らしながら通常通り農業や家畜の世話などをして生活しています。彼らの意識調査から、「自分だけが地震で大変なのではない、皆も同じだ」と、いつまでも落胆はしていないことが分かりました。ネパール政府からは家屋の被害が大きい世帯に 15,000 ルピー（約 18,000 円）ずつ援助がありましたが、各家屋を再建するには足りません。

学校については、JICA 支援の 2 室をそれぞれ 2 分割して 4 室に増やし、廃材利用で 4 室を建てた他、政府とユニセフ支援による仮設教室が 4 室と仮設トイレが 4 個室建設されました。こうして現在は計 12 室の仮設教室で学生達は学び、教員室・事務室は図書館と併用しています。

JICA 支援の 2 教室の校舎（現 4 教室）

廃材で建てた 4 教室の仮校舎

政府とユニセフ支援の 4 教室の仮校舎

バル・ピパル学校は、「フィリピンの友を援ける会」のご支援で念願の小学校（1～5 学年）、「ブッダ基金」のご支援で中高校（6～10 学年）が建ち、その後も皆様のご支援で図書館や保健室なども併設され、15 年かけて建設・運営されてきました。その学校が地震でほとんど壊れてしまい、とても悔しい思いです。

しかし現地では家屋再建の目途が立たない中、村人達が校舎再建まで考える余裕はありません。そのため、バル・ピパル奨学基金はこれまでの教育支援を継続しながら、今後は全半壊してしまった校舎を再建したいと考えます（表 1）。まず安全に建物を解体し、解体時の部材などは再利用します。解体後、耐震性のある構造の校舎を再建します。私達は、次の 4 つの理由により校舎の再建が必要と考えます。

① 現在の仮設校舎は耐久性が低くいずれ使用不可能となるため、再建しなければ学校を閉鎖せざるを得ない。
② 再建活動により現地の村人を雇用することができ、雇用された村人は自らの家屋の再建などを行うことができるようになる。
③ 基礎的な知識を学ぶ場である学校で提供されるサービスは公共財の性質を持ち、今後のネパールの将来や復興に大きく寄与できる可能性が高い。
④ 校舎を再建できれば他の村々の学校のモデルケースとなり、同様に学校再建が続く可能性がある。

【使用に必要な教室一覧】

幼稚園児・1～10 学年生の授業用教室：11 室、数学用：1 室※、理科実験用：1 室※、パソコン室：1 室
保健室：1 室、教員室：1 室、事務室：1 室　　計 17 室　（※10 学年のみ理数系を学ぶ教室が別に必要）

表1 地震被害による建物の修復・建設に関する見積

番号	項目	内容	費用(円)
1	4教室の修復	屋根はそのまま利用、ヒビの入った壁の修復	480,000
2	2教室の再建	ドア・窓・床はそのまま利用、崩れた壁を再建	600,000
3	1棟のトイレの修復	崩れた壁や床の修復	120,000
4	パソコン・印刷機・コピー機の購入	壊れて使用できない機器の購入	120,000
5	4教室の再建	全壊した教室の代わりに、鉄筋コンクリートの教室の再建	6,000,000
6	1教室(実験室)の再建	全壊した教室(理科実験室)の再建	1,200,000
7	1棟のトイレの再建	全壊したトイレの再建(男女別　各個室2～3)	360,000
合計　：　11教室　と　2棟のトイレ			8,880,000

●緊急に必要な項目は、1～4です。

17 室のうち 2 室は簡単な補修で使用可能、残り 15 室のうち上記 11 室は修復・再建が必要、残り 4 室は政府の支援を見込んでいます。これまで同様に運営・管理の資金も必要ですので、今後のご寄付の集まり具合に従い資金を再建のために充当したいと思います。可能であれば地震に強い 4 室の校舎を建設したいと考えますが、その場合の建設費は 600 万円程度と見積もっています。校舎の再建のためにも、これからもご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

★　パル・ピパル学校　第 4・5 回目の全国統一試験（SLC）結果

2014 年・2015 年の春にパル・ピパル学校の生徒が、全国統一試験（School Leaving Certificate (SLC)・高校卒業資格)を受験しました。結果は 2014 年に 26 名、2015 年に 17 名が合格、合格率は 2014 年に 65%、2015 年に 73.91%で、パル・ピパル学校のレベルが公立学校や全国平均合格率よりも高いことが表 2 の比較でわかります。皆様のご支援と、教師・学生の日頃から努力した結果だと思います。震災で困難な環境ではありますが、来年も良い結果を出すために勉学に励んで欲しいと思います。

表 2　全国統一試験(SLC)結果

年度	全国の受験者数	支援校の受験者数	支援校の合格者数			合格率(%)		
			1st レベル（得点 60%～<80%)	2nd レベル（得点 45%～<60%)	3nd レベル（得点 32%～<45%)	支援校	公立校	全国平均
2014	394,933	40	4	20	2	65.00	28.19	43.92
2015	574,685	23	3	13	1	73.91	33.18	47.43

(1) 学用品支援事業･･･就学生へ文具品の寄与

年間に必要な文具品を 2013 年度に 270 名、2014 年度に 234 名の就学生に寄与しました（表 3)。就学生 1 人に寄与する文具は鉛筆、消しゴム、ノート各種、ボールペン及び換芯、万年筆及びインクなどです。

表3 文具品を寄与したバル･ピパル学校就学生

年度	性別	学　年											計
		幼稚園児	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
2013	女子	8	2	9	7	12	5	20	15	15	14	22	129
	男子	5	7	9	9	3	14	23	23	14	12	22	141
	計	13	9	18	16	15	19	43	38	29	26	44	270
2014	女子	5	6	3	10	8	12	6	18	15	17	13	113
	男子	8	1	8	6	11	5	16	19	21	16	10	121
	計	13	7	11	16	19	17	22	37	36	33	23	234

（2）奨学資金支援事業･･･奨学生の決定及び文具品寄与

2013 年度は､14 の学校から優秀な奨学生 162 名、2014 年度はバル・ピパル学校の生徒 105 人に奨学金が寄与されました（表 4)。

例年通りサッレ村のバル・ピパル奨学財団が各学校に招待状を送り、奨学品の授与式が行われました。村々から奨学生達、代表教師 1 人と父母がサッレ村に集まり、文具品が各自に寄与され、踊りなどで祝いました。

表4 優秀な奨学生

年度	番号	村名	学校名	学年	人数
2013	1	サッレ	バル･ピパル学校	幼稚園～10	100
				SLC 1st	2
	2	ダダ	パンチャ・カンニャ学校	1～5	20
	3	ボシ	シャンカ・デヴィ学校	1～12	1
				SLC*	1
	4	ゴラバァンジャング	ゴラ・バァンジャング学校	1～3	1
	5	クマイジャムルング	スタナパティ学校	1～10	1
	6	バルマレ	クマリ・ディビ学校	1～10	1
	7	タリベシ	チャンデソリー学校	1～5	1
	8	セラベシ	ジャナバワナ学校	1～5	1
	9	ビスタ	アンナプルナ学校	1～5	1
	10	シムレ	マンズスリ学校	1～10	1
				SLC*	1
	11	ラマスタン	ラマスタン学校	1～8	8
	12	カテゥンジェ	マヘンドラ・バラヒ学校	1～12	1
	13	バンカルカ	カリカ学校	1～3	12
	14	ヴォルレ	マナルピ学校	1～10	9
	合計				162
2014	1	サッレ	バル･ピパル学校	幼稚園～10	100
				SLC 1st	4
				SLC*	1
	合計				105

*：ジャムルング行政区で最も高い点数を取った学生

＊高等教育奨学金支援

2011 年度から開始の高校卒業後の学生に対する奨学金支援です。最初の奨学生である Khadaka 君はカトマンズの医学関係の専門学校 Nepal Institute of Medical Science and Technology を卒業し、現在は就職活動中です。卒業により学費と生活費の一部として、年間 10 万円（3 年間）の Khadaka 君へ支援は終了しました。

（3）識字率向上支援事業･･･脱穀機導入の成果

村人達のために村へ脱穀機を導入した目的は、夜間クラスで学ぶ成人の出席率向上でした。現在ではほとんどの成人達が読み書きを覚えたため、夜間クラスは開講していません。脱穀機の利用は、母親達やその手伝いをする児童達の家事労働の負担軽減、それによる児童達の勉強時間の増加と学校出席率の向上などに役立っています。

（4）図書館設立支援事業･･･書籍購入・運営

2012 年度に図書館設立の準備積立金が 100 万円になり、その後は書籍や教材などを購入し管理人を雇用、運営しています。読書の他に各学年の授業が週 2～3 回行われ､図工などの作業も行っています。

この図書館は耐震設計で建てられ、地震の被害は受けませんでした。他の校舎や教員室が地震で崩れたため、現在は教員室・事務室と併用されています。

図書館で学ぶ生徒達(2014 年 4 月)

カバンを贈呈された生徒(2014 年 4 月)

（5） 学校運営支援事業

＊「サロン･ド･アサミ（Salon de Asami)」による教育ご支援

「サロン･ド･アサミ」は、音楽や講演など様々な文化活動を行う交流の場です。｢サロン･ド･アサミ｣代表者の石井氏が募金箱を設置し、サロンをご利用される方々に寄付を募って下さっております。この募金で小学校（初等部 1～5 学年）の女性教師 Kanchhi Maya Gurung, Kalpana Gurung と男性教師 Ganga Kuwar の 3 名の給与支援を行っています。物価上昇に合わせ毎年ネパール政府が教師の給与を昇給しているため、教師の給与も昇給せざるを得ず、当初予定よりも大きな出費となっていますが、サロンの皆様のご支援により継続しています。

またサロンでは、メンバーの兼康氏が主となり通学用布カバン 60 個を製作して下さり、2014 年 4 月に石井氏とご友人が村を訪れて幼稚園児と低学年の生徒達に贈呈されました。何ヶ月もかけて作成していただき、ありがとうございました。手作りのカバンを受け取った生徒達はとても嬉しそうでした。

＊音楽教育支援

石井氏、 Prayal 氏と家族

フルート奏者・故石井朝美氏のご遺族によるご支援で、バル・ピパル学校の生徒達が音楽に親しめるような活動ができるようにと、2009 年より毎年ご寄付をいただいてまいりました。このご寄付金で、仕立屋と音楽演奏を兼業とするカースト出身の男性 Raj Kumar Prayal を教師として雇用しました。彼は音楽や英語の授業の指導の他、お祭りや式典などでもネパールの伝統的な音楽や踊りを指導してきました。当初は 10 年間のご支援の継続予定でしたが、事情により 2014 年までの 6 年間で終了となり、Prayal 氏は 2015 年 4 月に教師を退職しました。

2014 年 4 月に石井朝美氏のご遺族がカトマンズを訪れた際、Prayal 氏と再会されました。退職は残念なことですが、この教師の経験をもとに彼の今後も活躍されるよう願っております。また、一般的に音楽の授業を設ける余裕がない村の学校に、その機会をくださった石井朝美氏とご遺族に感謝致します。

（6） 広報活動 ①･･･「フィリピンの友を援ける会」による教育ご支援

私達の NPO が設立する以前から、「フィリピンの友を援ける会」の皆様には、バル・ピパル学校の土地の購入と建設、教師の給与、生徒の給食・制服・鞄の供給、塾の運営、脱穀機の施設などの費用のご支援をいただいてきました。学年数が増えるごとに、それに伴う費用も増え、今日までのご寄付は合計 700 万円以上にもなりました。近々、会からのご援助が終了致します。このご支援により、バル・ピパル学校の運営が始まり、継続して多くの生徒に学びの機会を与えることができました。会の皆様には息の長いご支援をいただきまして本当にありがとうございました。

広報活動 ②･･･認定 NPO 法人「ブッダ基金」による教育のご支援

「ブッダ基金」の皆様には、教育支援活動の一つとして 2006～2011 年まで 6～10 学年（中高等部）の校舎建設と教師の雇用などご支援いただきました。その後は優秀な生徒に対する高等教育の奨学支援もしていただきました。2013 年 7 月にはカトマンズで村人達との会合と奨学生との面会に、同年 10 月には村へご視察に訪問して下さいました。

ブッダ基金の方々と記念撮影(2013 年 10 月)

2013、2014 年度は 5 名の教師の給与支給、給食費や保健医療費の補助などのご支援が継続され、おかげさまで通学する生徒数が増え学力も向上し、SLC 試験で良い結果を残すことができています。誠にありがとうございます。

広報活動 ③･･･建物の建設費

「サロン･ド･アサミ」代表の石井氏の個人的なご寄付で、2011 年にカトマンズ郊外の Dharmasthali 地区に約 100 ㎡の土地を購入、3 階建ての建物を建設しました。現地にて 2014 年 4 月に教師や村人が建物の完成式を行い、石井氏も参加されました。土地・建物とも現地のパル・ピパル奨学財団の名義とし、全 9 部屋を賃貸住居として貸しています。将来はこの賃貸収益によって現地で寄付に頼らずバル・ピパル学校の管理・運営が行えるようにすることが目的です。

建物完成を祝い、屋上で記念写真（2014 年 4 月）

地震が心配でしたが影響はほとんどありませんでした。全ての部屋が賃貸契約されている状態です。石井氏には度重なるご支援をいただき感謝しております。

(7) 寄付金収入及び正会員数

おかげさまで事業収支計算書の通り、2013 年度は 103 万円、2014 年度は 110 万円の会費・ご寄付が集まりました。両年度とも正会員は 15 名です。皆様のご協力に感謝申し上げます。

第11期事業収支計算書

（2013年1月1日～12月31日）

（単位:円）

科目	決算額
Ⅰ. 収入の部	
1. 入会金･会費収入	
正会員入会金収入	
正会員会費収入	80,000
2. 寄付金収入	
寄付収入	941,801
3. その他収入	
利息収入	9,615
当期収入合計(A)	1,031,416
前期繰越収支差額	1,091,905
収入合計 (B)	2,123,321
Ⅱ. 支出の部	
1. 事業費	
1. 広報活動事業	20,000
2. 学用品支援事業	150,000
3. 奨学資金支援事業	300,000
4. 識字率向上支援事業	70,000
5. 書籍購入支援事業	220,000
6. 図書館設立支援事業	0
7. 学校運営支援事業	740,000
8. 資料の及び刊行事業	0
2. 管理費	
通信費	17,970
印刷費	0
消耗品費	496
雑費	1,100
振替手数料	4,470
交通費	0
3. 予備費	0
当期支出合計(C)	1,524,036
当期収支差額(B)-(C)	599,285
次期繰越収支差額	599,285

第12期事業収支計算書

（2014年1月1日～12月31日）

（単位:円）

科目	決算額
Ⅰ. 収入の部	
1. 入会金･会費収入	
正会員入会金収入	
正会員会費収入	120,000
2. 寄付金収入	
寄付収入	982,892
3. その他収入	
利息収入	158
当期収入合計(A)	1,103,050
前期繰越収支差額	599,285
収入合計 (B)	1,702,335
Ⅱ. 支出の部	
1. 事業費	
1. 広報活動事業	30,000
2. 学用品支援事業	100,000
3. 奨学資金支援事業	200,000
4. 識字率向上支援事業	50,000
5. 書籍購入支援事業	120,000
6. 図書館設立支援事業	0
7. 学校運営支援事業	1,000,000
8. 資料の及び刊行事業	0
2. 管理費	
通信費	7,030
印刷費	0
消耗品費	605
雑費	1,564
振替手数料	4,270
交通費	0
3. 予備費	0
当期支出合計(C)	1,513,469
当期収支差額(B)-(C)	188,866
次期繰越収支差額	188,866

～ご支援のお願い～

バル・ピパル学校では幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教育を行っており、支援生徒数が 2013 年度に 270 名、2014 年度に 234 名になりました（表 3 参照）。SLC の合格率が高かったことも、とても喜ばしいことです。近年では来日して日本語学校で学ぶネパール地方出身の就学生の数が増え、さらに日本で専門学校や大学に進学希望する学生が多くなっています。ネパール全体で教育に対する意識と期待が高まっているように思われます。

これからも支援事業を続けていくために、どうぞ引き続き皆様のご寄付とご協力をお願いいたします。

＜ご連絡先＞

特定非営利活動法人バル・ピパル奨学基金

ホームページ・アドレス：http://barpeepal.com

メールアドレス：info@barpeepal.com

＜お振込先＞

郵便振替口座：00930－4－265848

口座名称：特定非営利法人バル・ピパル奨学基金

2015 年 8 月

特定非営利活動法人バル・ピパル奨学基金

地震による被害状況などを読売新聞、佐賀新聞、毎日新聞、日刊建設産業新聞、神奈川新聞に掲載していただき、より多くの人々に知っていただくことができました。誠にありがとうございました。

内容を探るとともに、後世に引き継ぐための記録とする。また、学校再開のために日本で調達した大型テント2張りなどを贈る。

トリプバン大では、建築科で学ぶ学生たちが考案した仮設住宅を視察する。この仮設住宅はトタンで地面をかまぼこ形に覆い、両側には厳しい季節となる。サッレ村出身者でもあるリジャル准教授は「地震直後は心配で何もできなかった。現地の人となぐさめ合いたい」、岡田准教授は「不安を少しでも減らすことができれば」と話している。

期に入り、テント生活者に取り組む考えだ。

ネパールでは6月から雨

（第3種郵便物認可）　2015年(平成27年)5月15日（金曜日）　読賣

ネパールへ2准教授派遣

東京都市大 被災地など調査

ネパール大地震の被災地を支援するため、東京都市大学は16日から、横浜市都筑区の横浜キャンパスにある環境学部の准教授2人を現地に派遣する。25日までの間、協力校の国立トリブバン大学（カトマンズ）や震源から約40キロのサッレ村で調査を行う2人は「現地の人に寄り添い、大学としての支援のあり方も探りたい」と話している。（長原敏夫）

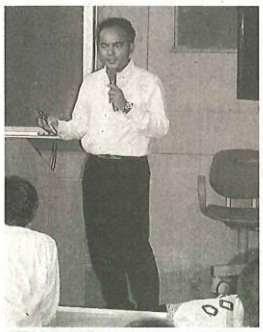
派遣されるのは、ネパール国籍で2010年から同キャンパスで教べんを執り、気候の変化に適応した住環境などを研究しているリジャル・ホム・バハドゥル准教授(45)と、経済学が専門の岡田啓准教授(40)。

東京都市大は10年ほど前から毎年、学生をネパールに派遣し、住宅環境や大気汚染、住民の幸福度などのフィールド研修を続けている。トリブバン大と協力校となった12年以降、研修地をサッレ村としており、准教授2人はその引率者でもある。

サッレ村は標高約1500㍍の山の斜面に開けた集落。幸いにも地震による犠牲者は出なかったが、約50軒ある民家の9割以上と学校が大破した。2人は同村で、被災状況、衛生、健康状態などの住民アンケートを行い、当面必要な支援の

ネパール・サッレ村でのフィールド研修の報告書などを手に地震調査への思いを語るリジャル准教授（右）と岡田准教授（14日、横浜市都筑区で）

毎日新聞　2015年7月9日（22面）



現地調査から戻り、支援の必要性を訴えるリジャル准教授＝横浜市都筑区の東京都市大横浜キャンパスで

ネパール人准教授 防災技術支援訴え

東京都市大で報告会

今年4月に発生したネパール大地震の被災地を訪れて支援や調査を実施した東京都市大環境学部のリジャル・ホム・バハドゥル准教授＝ネパール国籍＝と岡田啓准教授が8日、横浜市都筑区の横浜キャンパスで報告会を開いた。同大は現地のトリブバン大と協定を結んで毎年、ネパールに学生を派遣。サッレ村で住宅環境や大気汚染、住民の幸福度などを調べるフィールド研修を行っている。2人は5月下旬、震源地から約40㌔のサッレ村などを訪れた。

岡田准教授の調査によると、地震の被害は衣食住のうち住に集中。サッレ村は犠牲者が出なかったものの、60戸のほとんどが全半壊し、住民の8割ほどがテントでの暮らしを強いられていた。2人は仮設住宅の建設に必要なトタンなどを村に提供したという。

リジャル准教授は「トリブバン大の教員を招いて日本の持つ防災などのノウハウを学んでもらうような中期的な支援も必要だ」と訴えた。【水戸健一】

日刊建設産業新聞 2015年7月9日　朝刊2面

古い建物に被害

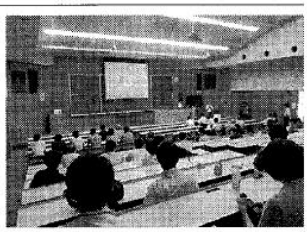
ネパール地震報告会

東京都市大学

東京都市大学は8日、神奈川県横浜市の横浜キャンパスで「2015ネパール地震報告会」を行った‖写真。

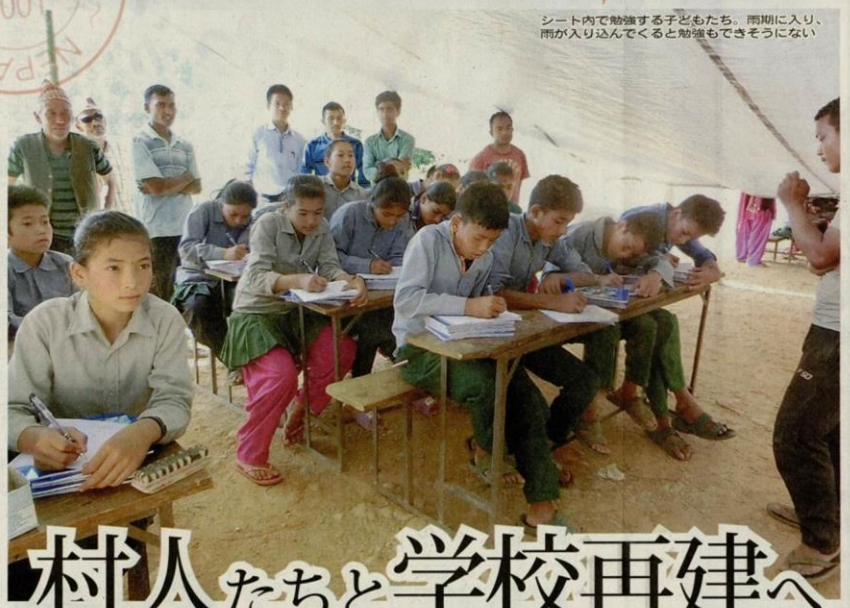
吉崎真司副学長は「5月に2人の教員が被災状況を確認しに現地に行った。現地の状況を見て学部として何ができるのか、学校として継続的に支援できることはないか考えるために調査を行った。本日は被災状況を報告する。報告を聞いてどういう支援をすればいいかを考えて欲しい」と挨拶した。

被災状況は、都市・地方部両方で家屋の被害が大きく、特に地方部では全壊しているところが多く見られた。都市部の被害の特長は、古く高い建物ほど崩れているところが多く、新しい建物の被害は少なかった。また、インフラ被害はほとんどなかったものの、世界遺産は倒壊していた。農村部の建物は全壊や半壊が都市部よりも多かった。外側は壊れてなくても内側にひび割れが発生しており、立て直しが必要な建物が多くみられた。



ネパール被災地から乗田さん（画家・唐津市）へ手紙

日本の支援で開校14年 地震で倒壊

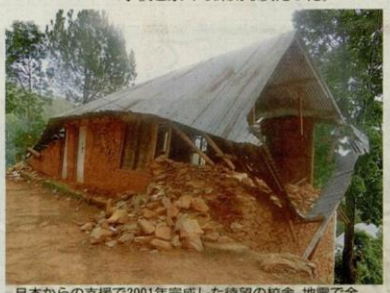


シート内で勉強する子どもたち。雨期に入り、雨が入り込んでくると勉強もできそうにない

村人たちと学校再建へ

唐津市在住の画家乗田貞勝さん(70)のもとに、ネパール大地震の被災地の現状を伝える手紙が届いた。差出人は同国出身で横浜市の大学教員リジャル・ホム・バハドゥルさん(45)。2人は15年前、カトマンズで出会い、乗田さんはリジャルさんの故郷の学校建設を支援してきた。その学校校舎が倒壊してしまった。

壁が崩壊した教室。黒板も押しつぶされている。首都カトマンズから約50キロ、震源地の隣県で標高1500㍍の山中にあるダディン郡サッレ村。幸い村人は無事だったが、5月中旬から1週間、故郷に戻ったリジャルさんが見たのは学校と家々の深刻な姿だった。



日本からの支援で2001年完成した待望の校舎。地震で全壊状態に

学校はリジャルさんの日本の友人らの支援を受けて2001年完成した。現在、村の小中高校生約260人が通う。一見大丈夫そうな教室もあるが、壁に亀裂が入り、いつ倒壊するか分からない。リジャルさんらは村人と校庭にシートを張って教室を急造した。

それでも心配は尽きない。村は寒暖の差が激しく、昼間は30度を超す。6月から雨期に入り、雨が入り込む屋外では勉強できない。「このままだったら学校が閉鎖されるのでは」。住民と生徒は不安がる。

ネパールの教育環境は厳しい。学校が完成するまで、サッレ村の子どもたちは隣村まで険しい山道を3時間歩いて通った。家業の農業を手伝う働き手でもあり、通学に時間がかかると学業を断念せざるを得ない。

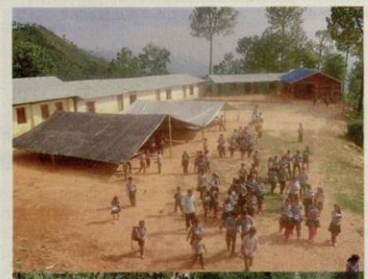
リジャルさん自身、同様の境遇で育ったが、日本人の支援や奨学金で留学し、現在は今回現地に派遣してくれた東京都市大学環境学部の准教授を務める。教育の大切さを知るだけに、学校の行く末を案じる。

乗田さんはパリ島画家で知られるが、1997年から4年間、エベレストや釈迦の生誕地ルンビニに通った。2000年、空港の待合室でリジャルさんと出会った。「目の輝きに、こんな青年が国を引っ張っていくのだろうと思った」と言い、以来、「ささやかながら」支援を続けてきた。

地震発生から2カ月。「再建は長い道のりになりそうだが、乗田さんのような支援者の存在が心強い」とリジャルさん。学校運営を支援するNPO「パル・ピパル奨学基金」などの協力を得ながら、村民と再建へ踏み出す。支援窓口は同基金。http://barpeepal.com/

（吉木正彦）

■ネパール大地震 2015年4月25日発生したネパール大地震では、死者が周辺国も含め8900人を超え、家屋約80万棟が全・半壊した。震源に近いカトマンズや山間部を中心に、れんがなどで造られた伝統住宅が倒壊し、大きな被害を出した。復興には67億ドル（約8300億円）が必要との見通しで、ネパール政府は各国に支援を要請している。



❷教室には亀裂が入り、いつ倒壊するか分からない。校庭に張ったシートが臨時の教室だ
❸東京都市大学の同僚らのアドバイスを受け、トタン板とレンガで造った仮設住宅。手前がリジャルさん
❹壊れた黒板の代わりに、日本から持参したロール状の黒板をベニヤ板に張って、さあ授業

▶電子新聞に 複数写真

ネパール大地震3カ月

教訓学ぶ動き広がる

県内の研究者着目 斜面にリスク、仮設を工夫

周辺国を含め、9千人以上が亡くなったネパール大地震に教訓を見いだす動きが、県内の研究者の間に広がっている。土木学会などの合同調査団長を務めた横浜国大の小長井一男教授は地震の規模や被害様相から「関東大震災との類似性」を指摘。東京都市大横浜キャンパス（横浜市都筑区）の環境学部は現地の事情に合ったトタン屋根の仮設住宅造りに協力した。関わった専門家は、25日で地震発生から3カ月を迎えた被災地に息長く向き合う必要性を訴えている。（渡辺 渉）

ネパール地震の被害報道では、日干しれんがを積み上げただけの揺れに弱い建物が次々と崩れた映像が繰り返された。

建物の構造が異なる日本で同じような被害が生じるとは考えにくいが、その一方で詳しくは伝えられてこなかったカトマンズ近郊の村々の被害実態に小長井教授は着目。「将来、私たちが直面する問題を示していると受け止めるべきだ」と警鐘を鳴らす。強い揺れに見舞われた山岳部や丘陵地で土砂崩れなどの斜面災害が多発したからだ。

4月25日に発生した地震のマグニチュード（M）は7・8。その規模は、東京や横浜を中心に10万5千人余りが犠牲になった1923年の関東大震災（M7・9）に匹敵する。

さらに、震源地から首都までの距離もほぼ共通している。ネパール大地震の震源は首都カトマンズから西へ約80㌔のゴルカ郡。東京都心から70㌔ほど離れた小田原が震源だった関東大震災とこの点でも重なっている。

現地調査後の報告会で関東大震災との類似性を指摘する横浜国大の小長井教授 ＝6月22日

小長井教授は「関東大震災級の巨大地震が再び起きれば、同様の斜面災害が東京や神奈川で起こりうる、ということだ」と指摘。「特に盛り土や切り土によって丘陵地に宅地を広げてきた横浜は注意が必要」と警戒を呼び掛ける。

実際、関東大震災では、首都圏を中心に167カ所で土砂災害が発生し、このうち101カ所が神奈川に集中したことが、これまでの調査で判明。土砂災害が原因の死者は千人を超えていたことも分かっている。「当時と比べ、危険な場所に人が住むようになった結果、土砂災害のリスクは高まっている」と小長井教授はみる。

また、震災時には本震から約2週間後の大雨が引き金となり、丹沢などで土石流が多発。揺れで弱まった地盤が雨でさらに緩み、崩落する影響が長期間に及ぶ恐れがあることを示している。ネパールは6月から雨期に入っている。

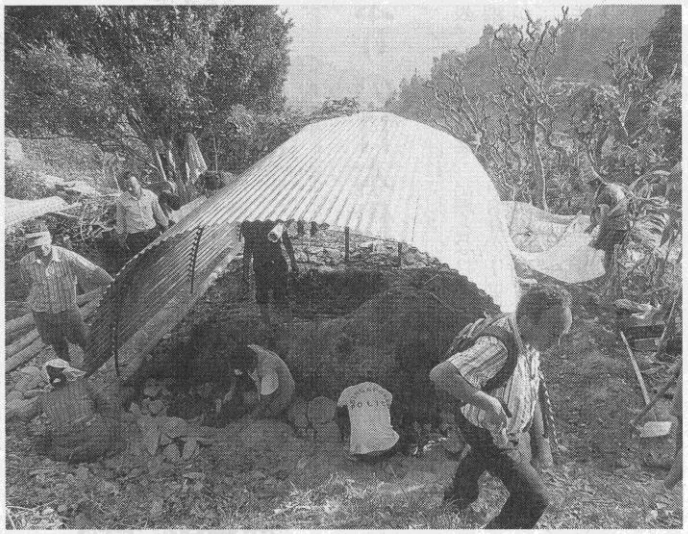
一方、東京都市大の岡田啓准教授は、ネパールで大きな被害を受けた建物の数（約50万戸）が東日本大震災や阪神大震災の全半壊棟数を超えている一方、人口規模が日本の5分の1であることから、今回の地震を「ネパール史上最大の国難」と形容。1カ月後の訪問時に調査した地域では「衣食住のうち、衣と食については大きな影響はなかったものの、住はかなり問題があった」と指摘する。

「特に農村の被害が深刻」で、外観上は被害があまりみられなくても室内の損傷度合いが激しく、余震への不安などもあって、テント生活を余儀なくされているケースが圧倒的に多かった。

こうした不安定な住環境を少しでも改善しようと、地元の大学が考案した「かまぼこ型仮設住宅」の建設にも協力した。現地の実情や被災者のニーズにかなったアイデアだ。

ネパール国籍のリジャル・ホム・バハドゥル准教授らは材料となる畳2畳分ほどのトタン板を運搬費を含め1枚約1500円で現地で購入。鉄パイプを地面に刺して半円形にした骨組みにトタン板を載せてかまぼこ型にし、側面の壁には木や石などを積み上げた。1棟当たりの費用は1万8千～2万円と安くはないが、「風雨に強い上、くぎを使わないためトタンの再利用が可能。住民にはとても喜ばれた」という。

「被災地では住まいの再建に対する不安が強く、継続的な支援が必要」とリジャル准教授。本格的な復興に向け、地元大学の教員を日本に招き、耐震や補修などの技術を身に付けてもらうほか、現地の状況を記録し、将来の備えや計画作りに役立てるといった展開を提案している。



上被害がより深刻なネパールの農村部。首都カトマンズから40㌔離れている 下被災地でかまぼこ型仮設住宅を建てる東京都市大のリジャル准教授（右手前）ら（同大の岡田啓准教授提供）